

除き百三十八印は全く本書に依りて世に示されしものなり。尙補遺には宋一金八元三印を入れ、附録には唐五代宋十三遠一金十元六明十三印を取り、皆大に史上の參考に供すべきものなり。

●金泥、石屑、二卷

羅振玉撰

卷上には印子金、古矢鏃、合符師比、銅刀、銅器、銅鼓、銅幣、銅鐘、銅塔、銅牌等凡五十一品の墨拓を影出し、卷下には古墳、瓦當筒、提滿、泥塔、日晷、石鏡視等二十五品の拓本を収めたり。皆精品にして影拓のみにても甚だ有益なるものなり。(以上右高)

●西洋上古史

文學博士 村川堅固著

西洋に於ける古代史研究は日に月に進展して舊説は次第に破壊せられ、幾多の新發見に伴うて獨創的研究漸次發表せられ、斯學の面目舊套を脱して絶えず更新せられつゝある今日、我國に於ては依然として陳腐なる舊知識が流布せられて、邦文著書中新しき上古史の知識を傳ふるの甚だ稀少なるは實に遺憾とすべきなり。本書はこの闕陥を補ふべき好著として、大類博士の「西洋時代史觀、中世」と共に昨年に於ける西洋史界の双壁と稱すべきものなる本書中に現れたる所説は著者が最新の研究に據り、而も嚴正なる批判の態度を以て一家の見解を發表せるものにして類書中に見ることを得ざる注目すべき論定觀察渺からざるなり。本書通篇二十一章、これに緒論を附して約四百頁筆を最古の國民集團、エジプト、

バビロニア、メソポタミア、アフリカに起し、第二章にアッシリアの興亡、四國對立、第三章にバルシアの統一を述べ、第四章より第十章に亘りギリシア時代を、第十一章より第二十一章四ローマ滅亡に至る迄ローマ史を論叙したり。吾人は是等の各章によりて上古諸民族の隆替興亡、社會生活の推移發展、各時代文化の實相に亘り確實なる知識を收得し得べく、又興味深く有益なる所論見解に接するを得べし。殊に本書の文體が質實簡素にして、一般の歴史著述を觀るが如き慣用的の修辭浮誇の文飾を避け、平明にして而も力強き筆致を以て叙説せられたるは確に注目すべき所ならん。

●E. Lipson: An introduction to the Economic History of England. Volume I. the Middle Ages. (London, 1915)

本書は近時世に出でたる英國經濟史の好著にして、其第一卷中世の部に於ては Manor の起原、組織、沿革及農業界の革命に關する論述より、都市の發達、市場、商工組合、毛織工業の諸問題を説き、最後に對外通商及國庫財政の實相を叙述したり。右の内著者が最も力を注ぎしと思はるゝは都市生活並びに工業の發達に關する章句にして、問々創見と稱すべき點乏しきにあらざるも、大體に於て本書の特色は從來の諸研究をよく取捨撰擇し、綜合安排せるにありて、新しき見解論證は甚だ鮮なりと云ふべし。殊に

Manor に關する説述の如き全然舊套を脱し得ざる觀あり。Amer. Hist. Rev. 誌十二 II. L. Gray 氏は本書を評して "an achievement in diligent sifting and Combining rather than in fresh and reasoned exposition." 云々の言を稱すべし。Gray 氏は尙本書中に於ける各事項に關する論述の配合鈞合ひが妥當を失ひ、且つ從來に於ける諸學者の重要な研究成果の參考し適用すべきものを逸せること多きを指摘し其所説に缺陷鮮少なからざるを擧げたるが、商工組合、毛織工業に對する叙説には新見解少からずして、毛織製造發達の時期に就いての論證の如きは著者の創見として尊重すべきものなるを述べたり。要するに本書は一方の權威として推稱すべき名著にはあらざるも、舊來の諸研究、公刊せられし諸史料に依據し、申世經濟史の要領を簡明に論叙せるものとして、史學研究に入らんとする人士に對し恰好の手引となるべく、更に進入して Ashley, Cunningham 等の名著と對照せんが、氏の創見とも稱すべき點も發見せられて、本書の價値も測定し得られ、裨益する所尠少なからざるべし。

● Robert Henderson Kifer: the German Empire between two Wars: a Study of the Political and Social Development of the Nation between 1871 and 1914. (New York, 1916)

本書はかの獨佛戰役以後現戰役に至る獨逸帝國の發展を論述せ

るものにして、通篇四部に分たれ、第一部に於ては帝國の對外關係即ち政府の外交政策及國民の海外發展の氣勢を説き、第二部に於ては國內政治界の狀態即ち政府政黨の關係を述べ、第三部には現時の主要なる國家的諸問題即ち勞働政策問題、宗教政策問題、アルサス、ロルレーン及ポーランド人問題を論じ、第四部には都市、學校、及言論界に現れたる更新の狀態傾向を叙説したり。著者が序言に述べたる如く、本書の主旨は近時に於ける獨逸國民の經濟上に於ける長足の進歩と政治上及社會上に於ける發展の停滯との顯著なる對照を解明せんとするにあり。而もこの對照を明確に論示せんとする態度は往々誇張に失し、經濟的發達と社會的進歩との本來相伴隨すべき自然的關係を輕んじ、後者の停滯を過重視して稍偏見る陥りたる感あるは、Amer. Hist. Rev. 記者も既に指摘せる所なり。(Amer. Hist. Rev. Vol. XXII No. 1 P. 157) 本書は近來續出する戰時の要求より出でたる際物的著述にあらずして著者が戰前平和の時代に企圖せる述作なれば、現戰役に觸れたる箇所は鮮く、從て比較的公正なる戰前獨逸の發展史を提示せるものにして、殊に記述平明且興味に富み、勉めて煩雜なる統計や科學的理論説を避ければ一般讀者にとりて恰好なる良書と云ふべし。而して著者が本書が戰時及將來の獨逸を説くものにあらずるも最も保守的にして過去を尊重する獨逸人は戰後の將來に於て

も本書に論述する所の現状を基礎を以て Organic growth をなすべきものなるを云へるは至言を稱すべし (Preface IX) 但し本書が引用資料、参考書目を全然掲げ居らざるは一般向の著述なりとするも稍不親切の感なき能はざるなり。

●Montagne Fordham: A short History

of English Rural Life, From the Anglo-Saxon Invasion to the Present Time, (London, 1916)

本書はアングロ・サクソン時代より現代に至る、英國の農村生活及農業界の沿革を簡明に叙説せるものにして、該國に於ける農民階級の歴史、農政上の主要なる問題を知らるの便利なる著述なり。本書を通覽すれば中世の村落生活 Manor の性質、農民の境遇、中世晩期に於ける新氣運、農界の革命、農民暴動より、スチュアート時代の状態、十八世紀代の社會的變動、續いて十九世紀に於ける農民問題、現時に於ける地方の革新的氣運に至る迄、能く推移變遷の大意を合點し得らるゝなり。卷末に農政上及これに關係ある諸法令を分類列舉し且つ其要旨を附記せるは至便と云ふべし。但し本書は何等の創見新研究を含める著作にはあらずして、只權威ある諸學者の著述を參考して簡便器用に編述せる所に其價値は存するなり。〔以上植村〕

●H. A. Mills The Japanese Problem in the

united states. New York 1915.

本書は、米國に於ける基督教會の提言によりて The Commission on Relations with Japan が太平洋岸に於ける日本移民の狀態を調査せしむるために派遣したるカンサス大學のミツリス教授の調査報告にしてカリフォルニア州を始めとし其附近太平洋岸の各地方に於ける日本移住民について明治十七八年頃よりの歴史、其分布、職業、生活狀態、土地法等を記せしものなり。其歐米人の眼に映じたる日本人の性格、同化問題に就ての著者の見解を述べたるところは國民性の了解上吾人に裨益するところあるを覺ゆ。〔西田〕

●Warne, F. T. The Tide of Immigration

New York 1916, ¥ 5.00

亞米利加の歴史は移入民の歴史ともいはるゝ程にて、之が亞米利加上如何に多くの分け前を有するかは、喋々を要せざる所、而も移入民は常に史上の事實に止まらず、現在も亦之を離れて其國情を察するに苦む。特に富源豊かにして移入民を誘致する事最も大なる合衆國に於て、此感を深くせざるを得ず。其最近十年間に於ける年平均の移入民が、百二十萬人を算せるを見れば、其數に於ては我が大阪市人口に近き人口が、年々増加せる譯なり、一四四年の如きは、歐洲戰亂の影響を蒙りて、其數一千三百五十萬を計上せらる。此盛況を以てしても、尙一九〇七年のそれに及ばず